

学校だより 希望の鐘

ひとつのつぼみはいちどしがひらかない



八 戸 市 立 小中野中学校

平成28年7月8日(金)

No.52

文責：校長
工藤聡

青春の悩み——中学生時代の経験から男女交際を考える——

きょうは私の中学生時代の経験から、「青春の悩み」について話をします。気楽に読んでください。

「青春」という時期が、だいたいいつ頃までをさすのかよくわかりませんが、私は、中学1年生の頃から18歳頃までをいうのではないかと思います。つまり、小中野中学校のみなさんも、そろそろその「青春期」にさしかかってきたということになります。この時期は、ちょうど子どもから大人へのかわり目の頃でもあるので、考え方もだんだん違ってきて、いろいろなことで悩むことも多いようです。大人になって、青春の時期をふりかえてみた時、『なんであんなつまらないことで悩んだんだろう』ということも多いような気がします。しかし、その時は本当に真剣に悩んでいるのだと思います。私も、中学生の頃、ものすごく悩んでいたことがありました。

あれは、私が中学1年生の頃ですから、今から45年くらい前のことです。当時の私は、身長155cmくらいで、背の低い順に並ぶと後ろから3番目でした。体重は60kg前後で、今よりかなりやせていたのです。今の私の体型からは想像できないと思います。右の写真は、私が中学校3年生の頃のものですが、その面影（オモカゲ：昔はこうだったろうと思わせるようす）はありますか？



2学期のはじめ頃、Y子さんという隣のクラス的女子に手紙をもらいました。女子から手紙をもらってものすごくうれしかったのですが、まわりの友達がひやかすので、へんにカッコをつけて、みんなの見ている前でやぶり、ゴミ箱に捨ててしまったのです。今考えれば、人をきずつけるヒドイことをしてしまったと反省しています。その頃の私は体も大きかったのですが、勉強の成績もけっこうよく、卓球部でも1年生ながら選手として試合に出ていて、うぬぼれて（ウヌボレル：実際以上に自分がすぐれていると思うこと）いたのかもかもしれません。なまいきでイヤな人間だったのでしょう。そんな私でしたから、このことをきっかけに、学級はおろか学年（5クラス）の女子全員が口をきいてくれなくなってしまったのです。人をきずつけるヒドイことをしたのですから、自業自得（ジゴウジトク：自分のした悪い行為のむくいを自分の身で受けること）といえるのですが、それにしても女子が全然口をきいてくれないのにはまいってしまいました。どこにいても、女子のきびしい目が私をにらんでいるような気がして、学校へ行くのがイヤになってしまった記憶があります。

結局、時間がたち、女子たちもだんだん話しかけてくれるようになったのですが、それ以後、同じ年頃の女性と話をするのがものすごく苦手となってしまったのです。女性と仲良く話をしている友達をうらやましく思ったり、ひょっとすると自分は一生女性とつきあうことができないのではないかと悩んだものです。今考えれば、それこそ笑ってしまうことですが、真剣に悩んでいたのです。

小中野中学校のみなさんも青春の時期で、それぞれ異性が気になる頃だと思います。好ましく思う人ができたり、その人と話をただでドキドキすることがあるかもしれません。あるいは、異性のことで苦しんだり、悩んだりすることもあるかもしれません。人間は悩んだ方が大きく成長できると言われています。悩むことで、いろいろなことを考え、解決にむけて努力するからだと思います。みなさんも、勉強のこと、友達のことなど、大なり小なりいろいろな悩みがあると思います。でも、それにおしつぶされることなくがんばってもらいたいと思います。今の悩みがみんなを大きく成長させてくれるのですから…。ただ、中学生の男女交際に関しては、時代がどのように変化しても、厳然（ゲンゼン：いかめしくおごそかなこと）たるルールがあることは確かです。「相手や周囲の人間をきずつけない」「心配をかけない」「親や先生に理解してもらえる行動をとる（中学生として責任をとれないことはしない）」が私の考えるルールです。人を好きになることは、人間として当たり前です。ただし、いろいろなことを考え、自制（ジセイ：自分で感情や欲望をおさえること）すること、大人へのステップとして大事なことだと思います。